

書評

中島俊郎『英国流 旅の作法 グランド・ツアーから
庭園文化まで』（講談社学術文庫）

渡邊潤爾*

Junji WATANABE

コロナ禍で海外旅行が困難になり、移動そのものに障壁が高まっている中で、国内の近場の観光地への需要が集まるという「地元志向」が高まっている。

コロナ禍が収束しても、今後国内の観光地が価値を高める方向に向かうべきだ。こうした現代の観光状況に示唆を与えられるのが、本書である。

そもそも英国人は自国に観光地としての価値を認めていなかった。西欧諸国の「古典教養」とは古代ギリシア・ローマを発祥とするもので、その遺産が多く残っていたイタリアでの古典教養の習得が目的であった。そしてイタリアでの古代ローマ時代の遺跡に注目が集まったのである。

18世紀、古典教養を学ぶために貴族の子弟や家庭教師がこぞってイタリアへと旅した現象は「グランド・ツアー」と呼ばれる。そこで英国はもちろん、フランス、ドイツなどのエリートの若者がこぞってイタリアを旅行した。そうした中で18世紀末にゲーテが『イタリア紀行』を著し、イタリアでの紀行文の古典的な名著と称された。その後、19世紀にA. デュマやディケンズなどもイタリア紀行を著しており、西欧の知識人にとってイタリアが古典教養の源泉だったことの証左となっている。

このようにイタリア旅行は西欧のエリートにとって教養の源泉だったわけだが、とりわけ英国人はその成果を自国にフィードバックしたことで現代につながる観光産業が誕生した。本書はこの過程を詳細にたどった学術的に価値の高い労作である。

グランドツアーでは古代遺跡だけが見られたのではない。彼らの旅した少し前のルネサンス時代に建造された田園地帯での庭園にも注目が集まるようになった。これらはギリシア・ローマ時代の詩で詠われた「理想郷としての田園」を連想させるものでもあり、こうして「田園回帰」という思潮が生じ、詩想を求めて田園を歩く「ペDESTリアン・ツアー」が行われるようになった。さらに自然が「美しい」という感覚から徒歩での旅行も行われるようになる。徒歩旅行から詩想が触発された結果、ワーズワスははじめ、世界的ロマン派詩人が次々生み出された。

こうした自然賛美の感性が、それまでさほど注目されていなかったイギリス本土の自然にも

* 東海学園大学経営学部経営学科

フィードバックされる。イングランド北部の湖水地方やスコットランドの溪谷などにも観光客が訪れるようになったのである。直接的にはフランス革命が始まって海外渡航が難しくなったことで国内旅行へとシフトチェンジしたわけだが、ガイドブック片手に風景観賞(ピクチャレスク美)で美意識が磨かれるようになった。こうした動きからピーターラビットのような文学作品が生まれ、後に「ナショナル・トラスト」という自然保護のシステムも構築される。

これらの動きは他の国々にも波及し、スイスやドイツのライン川流域の観光地化へとつながっていった。イギリスの会社クック社はこうした観光の消費者動向を察知し、団体旅行客を引率して決められた観光地を巡る「ツアー」という形態を生み出した。このように19世紀以降はイギリス人の動きを受けた観光産業の拡大が始まるのである。フランスの地中海沿岸のニースに「イギリス人通り」というのがあるが、いかにイギリス人観光客が多かったかということである。

本書は、2007年にNTT出版から刊行された『イギリス的風景 教養の旅から感性の旅へ』を改題、加筆修正したものだが、文庫化によって手に取りやすくなった。どんな時代もどんな状況でも、「旅で学ぶ」「旅で成長する」という信念を守り続けた英国人の軌跡をたどり、彼らがなぜこれほどまでに旅に焦がれ続けたのか、旅の効用とは一体何なのかについて、原点から考証した本書の意義は大きい。観光の歴史と観光産業の展開について学べる好著であり、コロナ禍で従来の観光の在り方が見直しを迫られる中でヒントを提示している。